

徳島大学地域科学研究 第3巻

モラエスの三つの絵葉書書簡集

— 絵葉書書簡からみえるモラエスの生活圏、旅行、信仰について —

佐藤征弥*・高木佳美**・石川榮作*・境泉洋*・宮崎隆義*

*徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部、〒770-8502 徳島市南常三島町1-1
E-mail: satoh@ias.tokushima-u.ac.jp

**徳島大学大学総合科学部、〒770-8502 徳島市南常三島町1-1

Three Books of Moraes's Picture Postcards

— Living Areas, Tourist Resorts, and Religious Piety —

Masaya Satoh*, Yoshimi Takagi**, Eisaku Ishikawa*, Motoriho Sakai*,
Takayoshi Miyazaki*

*Institute of Socio-Arts and Sciences, The University of Tokushima, Tokushima 770-8502, Japan.

**Faculty of Integrated Arts and Sciences, Tokushima 770-8502, Japan.

Abstract

Portuguese writer Wenceslau de Moraes sent a large amount of picture postcards to Portugal from Japan. 609 of them were donated to Tokushima city in 1989, and they are stored in the Moraes Museum located at the summit of Mt. Bizan. They were published as “*Moraes no Ehagaki-shokan*” and “*Moraes Ehagaki-shu I-IV*” respectively in 1994 and 2004, in Japan. Independent from the collection in Tokushima, a book of picture postcard-collection entitled “*Permanências e Errâncias no Japão*” was published from Fundação Oriente in 2004 in Portugal. In this paper, we characterized these books and summarized the data of the picture postcards concerning his living areas and tourist resorts where he visited. He was outing vigorously to famous temples, shrines, and tourist resorts in holiday while he lived in Kobe. However, such opportunity extremely reduced after he moved to Tokushima when he started a cloistered life. Although Buddhism gave a significant impact on his religious piety, that is able to be understood from his writings, his feeling to Shinto has been obscured. However, some picture postcards revealed his attraction to Shinto. There is a Moraes's photo that was taken at a waterfall when he lived in Kobe. The place is often explained as “Nunobiki-no-taki (Kobe Nunobiki Waterfall)”, but we found that the it was the “Tsutsumi-ga-taki” at Arima, now it is called “Tsuzumigataki Waterfall” in the Tsuzumigataki Park in Arima, Kobe.

Key Words: *Moraes Ehagaki-shu I-IV*, *Moraes no Ehagaki-shokan*, Moraes's Studies, *Permanências e Errâncias no Japão*, picture postcard, Wenceslau de Moraes

1. はじめに

ポルトガル海軍中佐としてマカオ港務副司令の任に就いていたヴェンセスラウ・デ・モラエス (Wenceslau de Moraes) は、1898年(明治31)に神戸に移り住み、外交官に転身した。ポルトガル領事を1913年(大正2)まで務め、おヨネの死を契機として職を辞して徳島に隠遁した彼は執筆活動に専念し、亡くなる1929年(昭和4)まで数多くの作品を残した。

彼はまた、親族や友人に非常に頻りに書簡を送っており、主に妹フランシスカ (Francisca) や親戚宛に送った絵葉書をまとめた『モラエスの絵葉書書簡』が1994年(平成6)に、友人達に送った手紙をまとめた『ポルトガルの友へ・モラエスの手紙』が1997年(平成9)に日本で刊行されている。前者には1910~1929年(明治43~昭和4)の20年間にモラエスが日本から送った葉書609通が収められており、そのオリジナルは現在、徳島市の眉山山頂にあるモラエス館に収蔵されている。同書の翻訳を手がけた岡村多希子氏は、モラエス館所蔵のこれらの葉書を「徳島市コレクション」と呼んでおり、本稿でもそれを踏襲する。徳島市コレクションの絵葉書は、徳島県立文学書道館によってデジタルデータ化され、2004年(平成16)に両面を原寸大に再現した四巻の絵葉書集(『モラエス絵葉書集I』~『Ⅳ』)として刊行された¹⁾。

徳島市コレクションとは別の絵葉書集“Permanências e Errâncias no Japão”がポルトガルのオリエンテ財団 (Fundação Oriente) から2004年(平成16)に刊行された。同書のタイトル“Permanências e Errâncias no Japão”は「日本での滞在とさすらい」という意味であり²⁾、日本からポルトガルの妹に送った絵葉書420点が収められている。本稿では以降同書を「オリエンテ財団刊行本」と呼ぶことにする。

モラエスがこのように大量の絵葉書を書き送った背景には、当時の日本の絵葉書ブームがある。日本の郵便事業は1871年(明治4)に始まり、2年後の1873年(明治6)に郵便葉書が発行されるようになり、1900年(明治33)に私製絵葉書の使用が認められるようになった。私製絵葉書は庶民に浸透し、風景絵葉書、美人絵葉書、年

賀状、記念絵葉書など様々なタイプのものが作られた。モラエスも多様な絵葉書を積極的に買い求め、先に挙げたタイプの他にも商業・産業、風俗を紹介したもの、芸術作品や芸能や祭りなどの文化を紹介したもの、大災害を記録したものなどを送っている。また彼は、1910年(明治43)1月1日付の『日本通信』の中で、日本の絵葉書についての記事を書いており、「どこの都市でも村でも名所でも、特有の絵はがきを売っている。」と当時のブームを紹介するとともに、自身も成年の年賀状をポルトガルに数十枚送ったことを記している³⁾。これら絵葉書の写真や絵柄、そして宛先である妹や親族に書いた彼の文章は、彼の日常の活動や志向、思想の一端を知る貴重な手がかりを与えてくれる。本研究では、風景絵葉書や各地の風物の絵葉書に注目した。神戸や徳島といった彼が暮らした土地についてはもちろん、遠くの観光地の絵葉書についてもその多くはモラエスが実際にそこを訪れて買い求めたことが絵葉書に記された文面や他の情報から分かる。そこで、モラエスの生活圈や旅行に関するデータをまとめ、神戸時代と徳島時代で比較した。また、彼は頻りに寺社に参詣に出かけており、絵葉書から見て取れる彼の宗教観についても述べることにする。また、数少ないモラエスの写真の中に、神戸時代に撮影された彼が滝を背景にして写っている写真があるが、滝の場所について誤った情報が伝わっていることが判明したので、それについても指摘しておきたい。

2. 三つの絵葉書書簡集について

本章では資料とした三つの絵葉書集の成立経緯や特徴について紹介する。特徴については表1にまとめた。

2.1. 徳島市コレクションについて

徳島市の眉山山頂のモラエス館にはモラエスがポルトガルに書き送った葉書が609点収蔵されており、徳島市観光協会が管理している。これは1989年(平成元)に元駐日ポルトガル大使であり、モラエスにも造詣の深かった故アルマンド・マルティンス・ジャネイラ (Armando Martins

表1 モラエスの三つの絵葉書集の特徴

資料	『モラエスの絵葉書書簡』 (1994)	『モラエス絵葉書集 I』～ 『Ⅱ～Ⅳ』 (2004)	“Permanências e Errâncias no Japão” (オリエンテ財団 刊行本) (2004)
絵葉書の所在	徳島市コレクション (モラエス館所蔵)	同左	カルロス・モンジャルディーノ氏所蔵
掲載枚数	609*	602*	420
宛先	フランシスカ・パウル(600)、 ジョゼ・パウル (3)、ジョア キン・コスタ(6)	同左	フランシスカ・パウル
裏側	縮小されて白黒で掲載	原寸大、カラーで全て掲載	原寸大、カラーで全て掲載
表側の文章	日本語訳のみ	オリジナルのまま全て掲載	6枚についてのみ掲載

*数が異なるのは『モラエス絵葉書集 I』～『ⅡⅣ』では絵柄のない官製はがきが掲載されていないことによる。

Janeira) 氏の夫人イングリッド・マルティンス (Ingrid Martins) 女史が、他のモラエス関係資料とともに徳島市に寄贈したものである。岡村氏によればこれらの絵葉書は、モラエスの甥 (姉エミリア (Emilia) の息子) であるジョアキン・コスタ (Joaquin de Moraes Costa) とその夫人の好意によってマルティンス氏に贈られたものである⁴⁾。

1994年(平成6)に刊行された『モラエスの絵葉書書簡』は、徳島市コレクションの全ての葉書に書かれた文章が翻訳され、裏面の写真や絵を小さな画像にして付して掲載されている。収められた609点のうち、妹フランシスカ宛が600点、彼女の夫ジョゼ・パウル (Jose Goncalves Paul) 宛が3点、甥ジョアキン・コスタ宛が6点である。これらの絵葉書が書かれた時期は、神戸時代の後半の1910年(明治43)から亡くなる1929年(昭和4)までであり、年毎の枚数は1910年(明治43)から順に104、50、113、111、91、38、19、14、16、16、17、9、0、0、1、1、6、0、1、2となっている。1910年(明治43)～1914年(大正3)の5年間は、1912年(明治45、大正元)が50点と少ないのを除けば概ね100点あたりで推移しているが、1915年(大正4)以降、数が極端に減っている。その原因が、モラエスが書き送る頻度が減ったためか、あるいは徳島市コレクションにないものが大量に残っているのか、

それとも到着後に失われてしまったためか不明である。しかし、シリーズになっている絵葉書において、モラエスの文章から全てを送ったことが分かっているものが、次に紹介するオリエンテ財団刊行本を含めても揃っていない場合があるので、失われたものがかなり存在することは確かであろう。

また、徳島市コレクションを基に2004年(平成16)に『モラエス絵葉書集 I』～『ⅡⅣ』が徳島県立文学書道館から刊行された (I, II, IIIは150点ずつ、IVは152点の絵葉書が掲載されている)。これは、コレクションの中から絵柄のない官製はがきを除いた602点について絵葉書の両面を原寸大に再現したものである。

2.2. オリエンテ財団刊行本について

“Permanências e Errâncias no Japão”は、モラエスが日本から妹フランシスカに送った未刊行の絵葉書を、ポルトガルのオリエンテ財団 (Fundação Oriente) が2004年(平成16)にモラエスの生誕150年を記念して刊行したものである⁵⁾。絵葉書の出典について同書には明記されていないが、岡村氏によればオリエンテ財団代表であり、同書の序文も書いているカルロス・モンジャルディーノ (Carlos Monjardino) 氏の個人コレクションである。同書では、420点の絵葉書の写真が原寸大で掲載されている。ほとんどが裏

面のみであるが、6枚については表と裏の両方が掲載されている。420点のうち裏面が同じ絵柄のものは2点のみである。また、徳島市コレクションの中で、さらにオリエンテ財団刊行本と徳島市コレクション間においても重複する絵柄のものも僅かしかない。モラエスは、様々な絵葉書を積極的に買い集めていたのはもちろんだが、送ったものを記録しておいて、以前に送ったものは再び送らないように心がけていたと思われる。

オリエンテ財団刊行本では掲載された各絵葉書の日付の情報はないが、同書のダニエル・ピレス (Daniel Pires) 氏⁶⁾の解説によると同書に収められている絵葉書のほとんどは1908～1913年(明治41～大正2)の間に書かれたもので、それ以降のものも少し含まれている。徳島市コレクションより2年前のものから始まっているが、1913年(大正2)より後のものが極めて少ない。徳島に移り住んだのは、1913年(大正2)の7月であり、本書で徳島のものが少ないのはこのためである。

オリエンテ財団刊行本において各絵葉書は、絵や写真の図柄やモラエスが書いた文章の内容に基づいて「日常」「文化」「宗教」「記録」「レジャー」の章に分かれて掲載されている。「日常」の章には、日常生活を送った神戸や大阪や徳島の景色や風物、休日に訪れた観光地の景色や風物などが入っている。「文化」の章には、美術作品、舞踊、阿波踊り、年賀状などが入っており、「宗教」の章には寺院や神社、祭りの様子が入っている。「記録」の章には、年賀状、事件、災害、鉄道の開通記念、そしてモラエスが参加した明治天皇による観艦式の様子や1913年(大正2)に大阪で開催され、モラエスもポルトガルの物産の陳列に尽力した明治記念拓殖博覧会の様子が入っている。「レジャー」の章には公園、動物園、温泉、海水浴の絵葉書が掲載されている。

3. モラエスの訪問地

3.1. 日本での訪問地

絵葉書のうち各地の風景や風物をテーマとしたものを整理し、都道府県別にまとめたのが表2である。徳島市コレクションとオリエンテ財団刊行

本を合わせると、兵庫県と徳島県のものが、ともに158点ずつで最も多い。兵庫県については、神戸に含まれる地域とそれ以外の地域について分けて示してある。神戸時代に領事の仕事を訪問することの多かった大阪が次いで多い。徳島県に関するものが徳島市コレクションでは131点、オリエンテ財団刊行本では27点と数が大きく異なっているが、これは前述のように後者では徳島移住後に送った絵葉書が少ないことによる。

それ以外に地域では、近畿地方や、東京、神奈川が多い。その他、伊勢や日光といった日本文化の色彩の強い観光地や、静岡と山梨の富士山に関するものが含まれており、これらはポルトガルの

表2 都道府県別の絵葉書の枚数

場所	枚数		
	徳島市コレクション	オリエンテ財団刊行本	計
兵庫県	73	85	158
神戸市(神戸市街、有馬、須磨、塩屋、舞子)	(56)	(63)	(119)
神戸市以外(淡路島、城崎、西宮、明石、宝塚、相生)	(17)	(22)	(39)
徳島県	131	27	158
大阪府	33	29	62
東京都	26	5	31
滋賀県	24	6	30
京都府	9	21	30
神奈川県	14	12	28
和歌山県	23	3	26
奈良県	11	4	15
三重県(すべて伊勢)	3	9	12
栃木県(すべて日光)	2	4	6
静岡県	2	1	3
広島県	—	3	3
岡山県	1	1	2
千葉県	2	—	2
山梨県	1	—	1
イギリス	1	1	2
長崎	—	1	1
愛媛	—	1	1
中国	—	1	1

妹や親戚のために日本を代表する観光地のものを送ったのだろう。

しかし、絵葉書を送ったということだけでは、モラエスが実際にそこへ訪れたかどうか分からないし、地域別の枚数の多寡がそこを訪れた頻度を反映しているとは限らない。そこで、これらの地域や場所を実際に訪問したかどうかを調べた。

『モラエスの絵葉書書簡』及びオリエンテ財団刊行本で紹介されている絵葉書の文面からそれが分かる場合がある。また、絵葉書には来訪を証明する記念のスタンプが押されているものもある。さらに、モラエスの著作や彼に関する他の資料についても調べ、訪問が証明できるものを探した。その結果を表3に示す。神戸の湊川神社、長田神社については、絵葉書集に頻繁に訪れていることが記されており⁷⁾、布引の滝もお気に入りの散歩コースであった⁸⁾。神戸時代には、休日に近隣の地域に観光に行くことが多かった。須磨へも何度も訪れており、おヨネと出かけた時のことは彼の著書『おヨネとコハル』の中の「敦盛の墓」の章に詳しく記されている。モラエスが送った絵葉書には、彼が海軍士官だったためだろうが、海や港や船に関する絵葉書が多く、表3に示したように須磨、舞子、明石、淡路島、小松島、鳴門、江ノ島に訪れていたことが分かった。また、海水浴に関する絵葉書も多く、西宮の香櫨園浜海水浴場や大阪の浜寺海水浴場といった当時人気の海水浴場に出かけていた。1911年(明治44)8月24日の葉書には、前日に香櫨園浜海水浴場に行ったことについて「今や海水浴ブームだ。海辺は人でいっぱい。ぼくは海水浴は大好きだが、身体に悪いだろうと思って、やらない。」と記している⁹⁾。また、海ではないが琵琶湖を大変気に入って、滋賀県大津に「度々行っている」と記し¹⁰⁾、琵琶湖については「見えている海は海ではなくて、広大な淡水のただの湖なのだ。魅力的な、天国のようなところだ。」と絶賛している¹¹⁾。また、表3には近江八景に数えられるものがいくつもあるが、モラエスは『日本夜話』の「日本の風景」の中で近江八景を紹介している¹²⁾。

徳島に移り住んでからは、徳島公園およびその中の城山、眉山の一部である桃山や大滝山公園、

山麓の忌部神社、瑞巖寺、金刀比羅神社、富田八幡神社が散歩コースであった¹³⁾。

モラエスは海軍士官としてマカオに赴任していた時期に何度か来日しており、その際に長崎、東京、横浜、鎌倉、江ノ島、日光、名古屋、奈良、京都、大阪、堺、神戸に立寄っていて、その印象を『極東遊記』の中の「日本の追慕」に記している¹⁴⁾。長崎は1889年(明治22)に初めて日本の土を踏んだ地であり、日本の第一印象を、姉エミリアに宛てて「ぼくはすばらしい国、日本にいる。ここ長崎で世界に比類のないこれらの木々の陰で余生を送れたらと思う。」と記している¹⁵⁾。ただしオリエンテ財団刊行本における長崎の絵葉書は茂木港の風景であり、実際ここを訪れたのか不明であるため、表3には入れていない。また、富士山の絵葉書が数枚あるが、マカオ時代に鉄道で横浜から大阪へ移動する際にみただけであると思われるので、やはり表3には入れていない。

撮影対象が海外のものは3枚ある。オリエンテ財団刊行本は2枚で、昭和天皇が皇太子の時に訪英した時に撮影されたものと中国の青島の全景を撮影したもので、日本とドイツの戦闘が行なわれたことを紹介している記述がある。徳島市コレクションにはロンドンの写真が1枚あり、ロンドンに行った日本人からもらったものである。これら3枚はいずれもモラエスが実際に訪問したものではない。

3.2. 徳島時代の旅行について

モラエスが徳島に移り住んだのは1913年(大正2)の7月初旬のことで¹⁶⁾、7月8日の徳島からの最初の絵葉書に「精神の平安を求めにやってきたこの家から便りする。気分がいい。」と書いている¹⁷⁾。しかし、その少し前から徳島と行き来して移住の準備をしている。4月25日と4月26日に阿波踊りや眉山の絵葉書を神戸から送っており、神戸で一緒に暮らしていたおヨネを前年に亡くし、彼女の故郷の徳島に建てた墓を見に徳島に行き、その際に徳島の絵葉書を購入したであろうことが文面から分かる¹⁸⁾。

徳島県各地の景色や風物をテーマとした絵葉書は、徳島市コレクションの中に131点、オリエンテ財団刊行本中に27点存在する。これらは発

表 3 訪問が確認された絵葉書の地域と場所

都道府県	訪問が確認された場所
兵庫県（神戸）	神戸三宮商品陳列所、東遊園地、諏訪山公園、湊川神社、長田神社、布引の滝、布引水源地、岡本梅林、鼓ヶ滝（有馬）、摩耶山、奥平野祇園神社、須磨寺公園（須磨寺遊園地）、舞子宝塚旅館、見返り岩（宝塚）、丁子ヶ滝（宝塚）、香櫨園浜海水浴場、香櫨園恵美須ホテル、西宮神社、中崎公園（明石）、淡路島、城崎、津居山港
兵庫県（神戸以外）	桃山（眉山）、徳島公園、城山、大滝山公園、小松島弁財天、忌部神社、瑞巖寺、金刀比羅神社、徳蔵寺（石井）、地福寺（石井）、松又旅館（池田）、諏訪公園（池田）、富田八幡神社、立江寺、越後亭、鳴門、
徳島県	天王寺公園、生國魂神社、生國魂神社、箕面公園、松之寺（堺市）、浜寺海水浴場
大阪府	浅草
東京都	琵琶湖、長岡公園、石山寺、唐崎の松、日吉大社、坂本の桜の馬場、堅田、粟津の清嵐、瀬田の唐橋、八景亭（彦根）
滋賀県	金閣寺、清水寺、伏見稲荷玉山社、円山公園、保津川
京都府	横浜、鎌倉、江ノ島、箱根
神奈川県	和歌浦、紀三井寺
和歌山県	春日大社、奈良公園、若草山、東大寺、信貴山寺、大和長谷寺
奈良県	伊勢神宮
三重県	日光
栃木県	

神戸・大阪・徳島の市街地の風景、通り、橋、港など日常の生活圏の事物についてはここでは除外した。

行所が明記されているものがほとんどであり、計9つの発行所が確認された。鳴門のものは瀬戸瀧野商店と撫養町瀬戸絵葉書部が、徳島市のものは小山助学館、徳島駅構内松竹梅、太田諧々堂、井関書店、徳嶋眉山公園保勝会が、小松島のものは濱田書店と太田諧々堂が、池田や祖谷など県西部のものは原田商店が発行している。絵葉書が庶民生活に浸透すると全国に発行所や専門店ができたが、徳島でもこのように多くの所で絵葉書が作られていたことは、当時の絵葉書ブームがいかに盛り上がっていたかが表れている。

徳島時代のモラエスは、散歩を日課としていたものの交通機関を使って遠出することはめっきりと少なくなった。岡村氏の指摘によれば、神戸や和歌浦に出かけた以外は「徳島に暮らした十六年間モラエスは全くといってよいほど徳島の外に出なかった」¹⁹⁾。徳島時代のモラエスが遠出したのは次の通りである。

1913年（大正2）

9月24日 吉成（徳島市応神町）²⁰⁾

10月下旬 小松島（11月中旬にも訪ねた可能性が高い）²¹⁾

12月22日 神戸²²⁾

1914年（大正3）

春 和歌山の和歌浦紀三井寺²³⁾

5月6日 石井町徳蔵寺²⁴⁾

6月8日 池田²⁵⁾

6月12日 鳴門市撫養²⁶⁾

6月21日 神戸²⁷⁾

7月8日 小松島²⁸⁾

1915年（大正4）

3月 立江寺²⁹⁾

5月13日 石井町地福寺³⁰⁾

5月末 池田³¹⁾

上の旅行時期を見ると1914年（大正3）の前半に比較的多く出かけている。彼の随想録『徳島の盆踊り』には同年5月6日の日付で「このあたりで私の随想ノートを日記形式に綴ることにする。」とことわった上で、「まだ書きのこしていることは、日常的なできごとの中でふと気づいたり、徳島周辺での小旅行で感じた折々の印象である。」と旅行について書くことを宣言し、その日

に石井町の徳蔵寺に藤を見に行っただけを書き残している³²⁾。この日記形式は同年8月24日まで続き、モラエスが頻繁に旅行をしていた時期と重なる。おそらくこの時期の旅行は随想録に「小旅行で感じた折々の印象」を書く目的のために出かけたのだろう。

数少ない旅行のうち、藤の花の盛りの時期に石井町の藤で有名な寺の訪問と、池田への泊まりがけの旅行を2度ずつ行っている。1914年(大正3)に池田に行った時の文章には、17年前にも同じ旅館に泊まったこと、そして池田の人たちが親切にもてなしてくれることへの感動が記されている。また、小松島へは1913年(大正2)の10月末に訪れ、11月15日の葉書にも数日前に小松島に行ったとあり、本当だとすればすぐにまた再訪したことになる。ここへは翌年の7月8日にも訪れており、気に入った場所の一つだったのである。この時の訪問について『徳島の盆踊り』では、小松島のことを「徳島のカスカイス³³⁾、つまり今はやりの徳島の海岸である。人々は夏場は海水浴をしに、他の季節には仕事のいつもの単調さや、商店ぐらしの気ばらしをしにここに来る。」と評していて、小松島が当時このような行楽地であったことが分かる。

3.3. 旅行機会の減少について

1915年(大正4)の6月以降、遠出に関する情報は一切なくなる。前述のように絵葉書の枚数がこの年を境に急激に減っていることがあり、出かけていてもそれが分からない可能性もあるが、1915年(大正4)8月8日のフランシスカ宛の葉書に「以前は、神戸にいるときは、日曜日にはよく出掛けていたが、今では、どの日もぼくには同じだ……」と出かける機会が減ったことをモラエス自身書き記している³⁴⁾。1919年(大正8)には体調の悪化がはっきりと表れてくる。5月10日の手紙には「ぼくは大変に疲れている—腎臓だ」と書き³⁵⁾、この年、神戸領事アルブケルケ(Cerveira de Albuquerque)が訪ねた際には、歩き過ぎたせいで尿が真っ赤になったと訴え、腎臓が悪く脚も弱りまだ生きているのは不思議なほどだと述べている³⁶⁾。また、この年の6月9日に鳴門の風景の絵葉書を妹フランシスカに送

っているが、鳴門について「遠くだ」と書いていて³⁷⁾、遠出するのが肉体的にも精神的にもつらくなっていたであろうことが窺われる。

旅行が減った理由として、領事を辞めたことによる金銭的な問題や、神戸時代のコウト(Pedro Vicente do Couto)やおヨネのように一緒に旅行を楽しむような者がいなかったこと、そして後年の体力の衰えといったことが考えられるが、執筆活動はむしろ徳島時代に盛んになったことを思えば、それらに加え、外への関心が薄れ内面的なことに関心が向かい、自ら述べているように隠遁生活を求めたことが挙げられよう³⁸⁾。

3.4. 寺社への参詣と宗教観

オリエンテ財団刊行本の解説の中でピレス氏は「この絵葉書集において特に重要なのは、モラエスが頻繁に仏教寺院や神道の神社へ参詣していることであり、その細々とした記録を取めた本書は、彼の宗教的信条を明らかにした最初の刊行物だろう」と述べている。それが端的に分かる例として、彼はモラエスが京都の伏見稲荷の絵葉書を送った時に記した「私は非常に日本の神々に愛着を持っていて、そこに数回参詣している」という文章³⁹⁾を挙げている。また、別の日の絵葉書には「昨日、私は西宮の幸運の神えびすさんの祭りに行ってきた。私はほぼ毎年この祭りに行き、神に祈っている。このために私はとても幸運だ!…」と書いている⁴⁰⁾。モラエスが徳島時代に墓参りを日課にしていることや毎月尼僧を呼んで仏壇に供養してもらっていたこと、神社のお祭りに出かけていたことは彼の著書『徳島の盆踊り』や『おヨネとコハル』に詳しく書かれていることであり、ピレス氏が重要性を認めたのは、神戸時代から頻繁に寺社に通っていたこと、もしくは神道への神に対するモラエスの愛着が表明されていることだと考えられる。モラエスは仏教に関しては度々著作の中で触れているが、神道に関しては客観的な解説を書いてはいるものの個人的な心情を述べてはいないため、妹フランシスカに宛てた絵葉書の文章はそれが分かる貴重な手がかりである。しかしながら、これらは妹に宛てた気楽な文章であるため、そこに書かれているように西宮神社のえびす祭りに行ったから幸運になったと彼が本当

に信じていたと即断することできない。

モラエスが日本の神仏に対して非常に信心深かったことはモラエスの行動を調べた花野富蔵氏による『日本人モラエス』の中に描かれている⁴¹⁾。それによるとモラエスの朝の習慣は、午前6時前に起床したのち「神棚に燈明を点じ、新鮮な榊や新芽松を供へて、神さまを拜む。次いで、佛壇にも燈明と線香と新鮮な花とを供へ、茶や供物をお祀りする。さうして、始めて、彼の日課にとりかゝる」というものだった。また、神棚に町内の氏神である諏訪神社のお札を収め、台所には荒神を祀り、裏庭には地蔵を祀って拝んでいたという。だとすれば、このような習慣は、単なる興味や勉強のため、あるいは近隣の人々に受け入れてもらうために日本人の習慣を形式的に真似ただけとはとても考えらず、神道や仏教が彼の宗教心に大きな影響を与えていたことは間違いない。しかし、神道や仏教に完全に帰依していたわけではないことは、彼の著作から明白である。徳島に移り住んで最初の頃、おヨネの墓を参ることを日課としていた彼は、墓参について「私は行きずりの異邦人であり、この人たちの信仰とは無縁な人間ではあるが、彼らの風習になじみ」と記しており⁴²⁾、おヨネの墓があるから行くのであって、仏教に対する信仰とは別物であることを表明している。その後、徳島で一緒に暮らしたコハルが亡くなり、彼は自宅に仏壇をかまえて毎月尼僧を呼んで彼女らの供養してもらうようになる。『おヨネとコハル』には、仏教の影響を受けていることがはっきりと示されていると同時に彼独自の宗教について説明されている。「おヨネだろうか……コハルだろうか……」の章では、「私をとりまいている宗教的、神秘的環境が私の感じ方に何ほどかの影響を与えたであろうことは確かである。」と日本の宗教の影響を認めつつ、「私が心に感じているのは、仏教などというものでは全然ない。私が感じているのは、不思議な花、勢いのよい雑種の、蘭の花、それは私だけのものであって、すでに成長し、その生育にふさわしい環境、異国情調、孤独、追慕の念というあたたかい温室の中で繁殖している」⁴³⁾と独自の宗教観を披露している。また、「日本の異国情調」の章では、「審美家としての私の宗教はすでに久しい以前から、すべて

を支配する最高の掟として、事物というものには永続性がなくいずれは無に帰するのだという憂うつな考えを、さまざまな事物や様相から私に抱かしめる傾向を示していたが、その私の宗教は、彼女たちの死に際し、別の信仰 — 追慕の宗教に変わった。」⁴⁴⁾と仏教の無常観への共感を表明しつつも自分の宗教を「追慕の宗教」として宣言している。これらのことから彼は仏教を自らの「追慕の宗教」に取り込んで、その手段や道具にしたと言える。すなわち無常観を彼の宗教の教義の一部とし、仏壇や墓を重要なアイテムとし、墓参りや尼僧による祈祷もまた自らの宗教の儀式とした。

仏教の影響が色濃く見られる一方で、神道についてそれが分かる記述はほとんどない。前述の「私をとりまいている宗教的、神秘的環境」にはおそらく神道も含まれるのだろう。晩年の著作『日本精神』の中で「宗教」の章で神道と仏教について解説している。神道については「長い変化の過程を経て、太陽の女神、天照との密接な親族関係があるものとして君主を神格化し、国民を神格化した。」⁴⁵⁾と分析し、「庶民は、五〇年前、五〇〇年前、一千年前と同じように今日なお強い自負心にあふれ、深く神道を信じ激しい愛国心を抱いている」⁴⁶⁾と身の回りの人々の中に神道が息づいていることを感じている。しかし、一方で神道は庶民にとって身近な死者を慰めるための宗教になっていないとその欠点を指摘している⁴⁷⁾。また、『おヨネとコハル』の「日本の異国情調」の章において、フランスの軍人であり作家であり、日本に滞在し日本に関する著作を残したピエール・ロティについて、ロティが日本を好きではなく「神々は醜悪だと思っている」⁴⁸⁾ことを暗に批判しており、モラエス自身はそう思っていないことが窺われる。これはモラエスが伏見稲荷の絵葉書に「私は非常に日本の神々に愛着を持っていて、そこに数回参詣している」と記していることと呼応する。オリエンテ財団刊行本における神道に対する本音が垣間みられることは、ピレス氏の指摘のように確かに貴重であると言える。

3.5. 滝の写真

モラエスが写った写真の中に、滝を背景にした

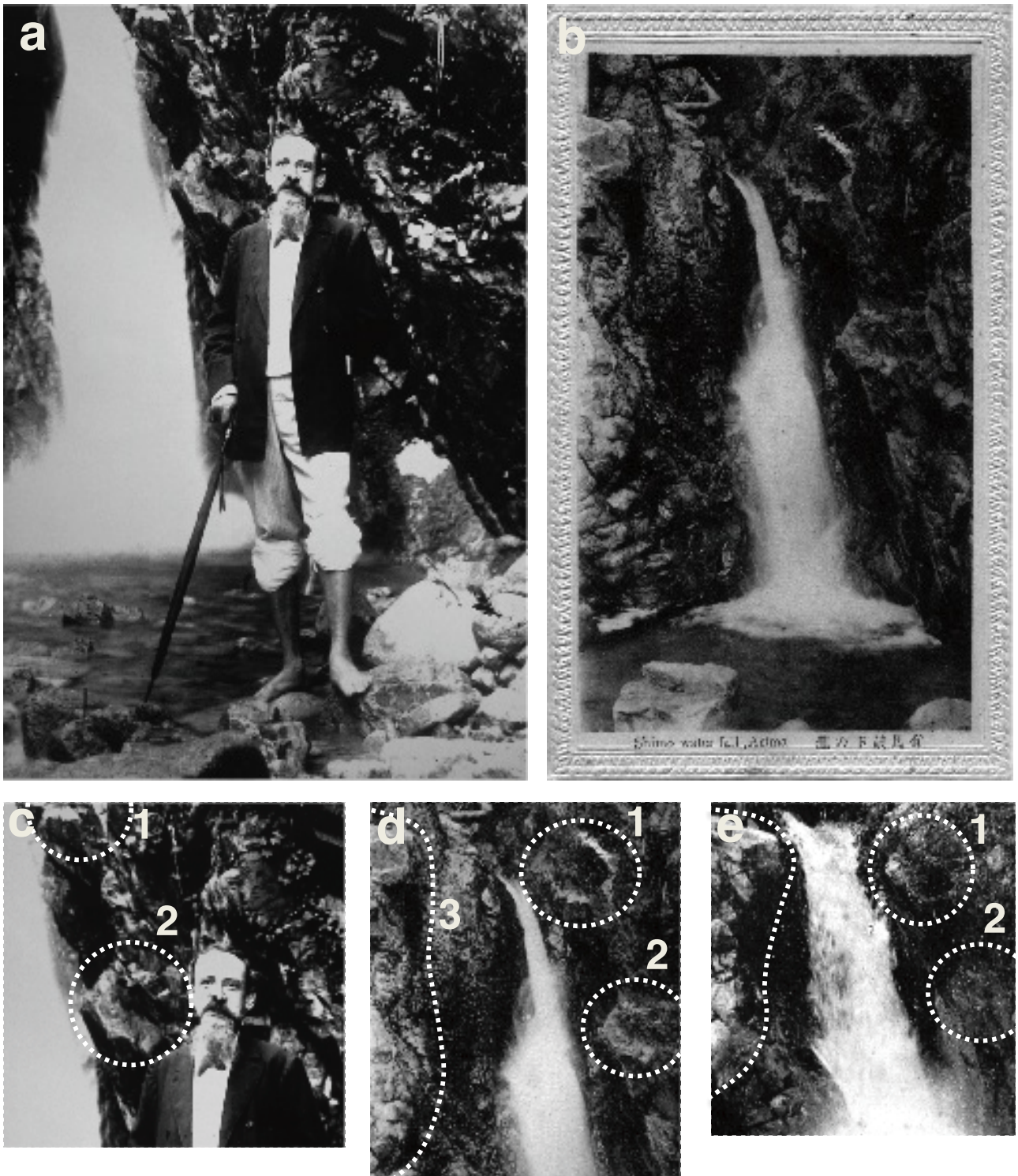


図 滝の写真の検証

a：滝を背景にして撮ったモラエスの写真、b：モラエスがこの滝で写真を撮ったと記してある絵葉書（写真の下に「有馬鞍下の瀧」と印刷されている）、c：aの拡大図、d：bの拡大図、e：「鞍ヶ瀧」と記された別の絵葉書の拡大図。c-dにおいて、岩の形が一致する部分を点線で囲って示しており、各写真で数字の番号が同じ部分の形が一致している。

ものがある(図の写真 a)。モラエスに関する資料では、従来この滝は神戸の布引きの滝とされてきた⁴⁹⁾。前述のように布引の滝はモラエスのお気に入りの散歩コースであったし、滝の形もこの写真と似ている。しかし、今回絵葉書データを整理していて、これが布引の滝ではないことが明確になったので記しておきたい。

『モラエスの絵葉書書簡』には、滝の写真の絵葉書の文面に「この写真は、有馬の下の美しい滝だ。お前がよく覚えているとするならば、そしてぼくもよく覚えているとするならば、何年か前にぼくが自分の写真を撮って一葉お前に送ったのは、この滝のそばだった[有馬の滝の滝壺のそばで杖を片手にズボンをまくりあげたスタイルで撮った写真]。」とあり、モラエス自身がこの写真の滝が布引の滝ではなく有馬の滝であることを書いている⁵⁰⁾。この絵葉書を拡大したのが写真 b である⁵¹⁾。写真の説明には「有馬鼓下の瀧 Shimo water fall, Arima」と印刷されている。写真 c, d にこれらの写真の比較を示すが、点線で囲った部分 1 と 2 において岩の形が一致し、同一の滝であることが分かる。よってこれは布引きの滝ではなく、有馬の滝であることは間違いない。

なお、これと同じ滝はオリエンテ財団刊行本にも含まれており、「攝津有馬鼓ヶ瀧 TSUTSUMI WATER FALL, ARIMA, SETTSU」と絵葉書に印刷されている⁵²⁾。しかし、滝の名称について徳島市コレクションでは鼓「下の瀧(しものたぎ)」、オリエンテ財団刊行本では「鼓ヶ瀧(つつみがたぎ)」と両方で違っている。この滝について古絵葉書を調べたところ「鼓ヶ瀧」としているものがほとんどであった。念のため「鼓ヶ瀧」と表記している絵葉書⁵³⁾について滝の形を比較したが、やはり点線で囲った滝の左右の岩の特長が一致し、「下の瀧」と「鼓ヶ瀧」が同一の滝であることが確かめられた(写真 d, e)。

この滝は、現在は「鼓ヶ瀧(つつみがたぎ)」と呼ばれ、神戸市有馬の鼓ヶ瀧公園内にある。「鼓」の字は「鼓」に変わり、読み方も「つつみ」から「つつみ」になっている。ちなみにこの滝は、昭和 13 年(1938 年)の水害の際に崩れ、後に修復されたが滝の形は大きく変わった。滝壺は残っているものの、図で示した岩の特徴はなくなった。

4. おわりに

本稿で資料としたモラエスの絵葉書は、オリエンテ財団本の 420 点の全てが、そして徳島市コレクション 609 点のうちの 600 点が、妹フランシスカに宛てたものである。モラエスには二人の姉妹がいて、5 歳年上の姉エミリアと 3 歳年下の妹フランシスカである。彼は自分と似て神経質な妹フランシスカのことを気にかけていた。彼が 17 歳の時に父親が亡くなり、一家の男は彼だけとなったことも彼女の庇護者としての立場を強く自覚する要因になったと思われる。彼女の結婚後もその気持ちは変わらず、愛情のこもった書簡を終生送り続けた。フランシスカからもモラエス宛に頻りに書簡が届いたが、それらは残っていない。モラエスが多種多様な絵葉書を送ったことには、彼女を楽しませようとする意図が多分にあったと思われる。時には、自分で考えたジョークが書かれていることもある。本稿において整理したように、モラエスが日常的に、また旅行で、どういう所に出かけていたか分かるのは、彼がそれをフランシスカに逐一報告していたことによる。そして、気の許せる相手であるからこそ、著作には見ることのできない彼の本音が表れた文章も絵葉書には書かれている。前章 4 節で述べたような神道に対する愛着の表明はその例である。このように徳島市コレクションとオリエンテ財団刊行本の絵葉書は、モラエスの様々な面を明らかにする上で多くの情報を有している。前章 5 節で述べたモラエスの写真に写っている滝が布引の滝ではなく、鼓ヶ瀧(現 鼓ヶ瀧)であることは、徳島市コレクションとオリエンテ財団刊行本の両方を詳しく調べることにより明らかになった。これらの絵葉書集には、本稿で取り上げた風景や風物の絵葉書以外にも様々なジャンルのものが含まれている。それらの整理と分析は、モラエスの活動や精神世界について新たな情報を与えてくれるだろう。

謝辞

調査にあたりご協力いただいた徳島県立文学書道館の計盛達也氏、前徳島県立文学書道館参与丁

山俊彦氏、ならびに東京外国語大学名誉教授岡村多希子氏に深く感謝申し上げます。

註

- 1) 『モラエス絵葉書集 I』～『Ⅱ IV』は非売品であり、所蔵は徳島県立文学書道館のみである。館内の図書室の書架で自由に閲覧できる。
- 2) “Permanências e Errâncias no Japão”の日本語版は出ていない。本書のタイトル、解説文、モラエスの文章は本稿の筆者佐藤の訳による。
- 3) 『日本通信 V』13章「絵はがき作り 社会の全階層の芸術趣味の発展に対する影響 日本の絵はがき収集狂」と題した記事（『定本モラエス全集 III』333-335 頁より）
- 4) 徳島市コレクションの歴史については『モラエスの絵葉書書簡』363 頁に解説がある。
- 5) モラエスは 1854 年 5 月 30 日にポルトガルのリスボンで生まれた。徳島県立文学書道館の『モラエス絵葉書集 I』～『Ⅱ IV』も 2004 年に作成されたが、“Permanências e Errâncias no Japão”とは無関係に、またモラエス生誕 150 周年とは関係なく作られたもので、刊行年が一致しているのは偶然である。
- 6) ダニエル・ピレス氏はポルトガルのモラエス研究者であり、モラエスの伝記“Wenceslau de Moraes: fotobiografia” (Fundação Oriente, Lisboa, 1993) やモラエスの書簡をまとめた“Wenceslau de Moraes, Cartas do Extremo Oriente”（「極東からの手紙」）の編集に携わり、また“Antologia 2a edição (Clássicos da literatura portuguesa)”の序文も書いている。
- 7) 湊川神社については“Permanências e Errâncias no Japão”の 22 頁にモラエスの文章の抜粋があり、長田神社については『モラエスの絵葉書書簡』114 頁に記されている。
- 8) 『定本モラエス全集 I』410-412 頁、定本モラエス全集 IV』486-489 頁、『日本人モラエス』93 頁
- 9) 『モラエスの絵葉書書簡』83 頁
- 10) 『モラエスの絵葉書書簡』125 頁
- 11) 『モラエスの絵葉書書簡』120 頁
- 12) 『定本モラエス全集 IV』501-506 頁
- 13) これらの場所は『モラエスの絵葉書書簡』『徳島の盆踊り』『おヨネとコハル』に登場する。
- 14) 『定本モラエス全集 I』101-171 頁
- 15) 『モラエスの旅 — ポルトガル文人外交官の生涯』92 頁
- 16) モラエスが神戸から徳島に引っ越した日時と経路については深澤の研究に詳しい（深澤暁「モラエス来徳日時・ルートについての一考察」モラエス第 9 号.1-8 頁（2006）
- 17) 『モラエスの絵葉書書簡』187 頁
- 18) 4 月 25 日の絵葉書には「徳島では、日本の死者の日（八月）には、死者のためのとても面白い踊りがある。その光景を送るよ。」（『モラエスの絵葉書書簡』178 頁）と記されているが、阿波踊りについては生前のおヨネから聞いていたことだろう。そして、翌 4 月 26 日の絵葉書には「ぼくが徳島に見に行った墓は、満開の桜でいっぱいのこの美しい山の麓にある。」とあり（『モラエスの絵葉書書簡』178 頁）、徳島を訪ねたのは彼女の墓を見に行ったためであることが分かる。
- 19) 『モラエスの絵葉書書簡』370 頁
- 20) 『徳島の盆踊り』286 頁
- 21) 『モラエスの絵葉書書簡』204 頁
- 22) 『モラエスの絵葉書書簡』212 頁
- 23) 『モラエスの絵葉書書簡』293 頁
- 24) 『徳島の盆踊り』248 頁
- 25) 『徳島の盆踊り』264 頁
- 26) 『徳島の盆踊り』267 頁
- 27) 『モラエスの絵葉書書簡』238 頁、『徳島の盆踊り』273 頁
- 28) 『徳島の盆踊り』281 頁
- 29) 『モラエスの絵葉書書簡』281 頁
- 30) 『モラエスの絵葉書書簡』268 頁
- 31) 『モラエスの絵葉書書簡』271 頁
- 32) 『徳島の盆踊り』247 頁
- 33) カスカイス (Cascais) はリスボン西方約 30 km に位置する大西洋に面した都市で、国際的リゾート地である。モラエスの時代と重なる 19 世紀後半から 20 世紀初頭、ポルトガルの王族は、夏の間ここに滞在することが多かつ

た。

- 34) 『モラエスの絵葉書書簡』 278 頁
 35) 『モラエスの絵葉書書簡』 320 頁
 36) 『モラエスの旅』 325 頁
 37) 『モラエスの絵葉書書簡』 321 頁
 38) 彼の隠遁生活と著作との関係性については宮崎らによる分析がある（宮崎隆義・佐藤征弥・境泉洋。「モラエスの庭 — (1)日記文学・随筆文学ということ —」、『徳島大学地域科学研究』第1巻, 47-55 頁 (2011)、宮崎隆義・佐藤征弥・境泉洋。「モラエスの庭 — (2)「随想」の変質 —」、『徳島大学地域科学研究』第2巻, 84-90 頁(2012)）
 39) “Permanências e Errâncias no Japão” 40 頁に、伏見稲荷玉山社の鳥居とキツネの像の写真の絵葉書が掲載されており、表側にモラエスが記した文章も抜粋されて掲載されている。プレスはこれを解説文の中に挙げている。
 40) “Permanências e Errâncias no Japão” 39 頁
 41) 『日本人モラエス』 185 頁
 42) 『徳島の盆踊り』 218 頁
 43) 『おヨネとコハル』 39 頁
 44) 『おヨネとコハル』 84 頁
 45) 『日本精神』 44 頁
 46) 『日本精神』 45 頁
 47) 『日本精神』 46 頁
 48) 『おヨネとコハル』 79 頁
 49) モラエス館に飾られている写真パネルには布引の滝であると説明が付されている。また、ヴェンセスラウ・デ・モラエス著、岡村多希子訳『日本精神』（彩流社, 1996）やデコウト光由姫著『モラエスとコウト友情物語—明治を愛したポルトガル人』（新人物往来社, 2001）の口絵写真でも布引の滝と説明されている。岡村氏は『日本精神』の口絵写真に「有馬の下の布引の滝」と記しており、有馬の滝であることは分かっていたが、布引の滝と異なることは気付かなかった。
 50) 『モラエスの絵葉書書簡』 208 頁
 51) この滝の絵葉書は『モラエスの絵葉書集 III』 125 頁にも掲載されている。ここではモラエス館及び徳島県立文学書道館の許可を得て徳

島県立文学書道館所蔵のデジタル画像データを使用した。

- 52) “Permanências e Errâncias no Japão” 47 頁
 53) 徳島県立文書館所蔵の絵葉書（資料番号：ウメハ 01542）を使用した。絵葉書には「攝津有馬鼓ヶ瀧」「TSUTSUMIGATAKI ARIMA」と印刷されている。

引用文献

- ヴェンセスラウ・デ・モラエス、『モラエス絵葉書集 I』～『Ⅳ』, 徳島県立文学書道館(2004)
 ヴェンセスラウ・デ・モラエス著, 岡村多希子訳, 『おヨネとコハル』, 彩流社 (1989)
 ヴェンセスラウ・デ・モラエス著, 岡村多希子訳, 『モラエスの絵葉書書簡』, 彩流社 (1994)
 ヴェンセスラウ・デ・モラエス著, 岡村多希子訳, 『日本精神』, 彩流社 (1996)
 ヴェンセスラウ・デ・モラエス著, 岡村多希子訳, 『ポルトガルの友へ・モラエスの手紙』, 彩流社 (1997)
 ヴェンセスラウ・デ・モラエス著, 岡村多希子訳, 『徳島の盆踊り — モラエスの日本随想記』, 講談社 (1998)
 ヴェンセスラウ・デ・モラエス著, 岡村多希子訳, 『モラエスの旅 — ポルトガル文人外交官の生涯』, 彩流社 (2000)
 ヴェンセスラウ・デ・モラエス著, 花野富蔵訳, 『定本モラエス全集』, 集英社 (1969)
 花野富蔵, 『日本人モラエス』, 青年書房 (1935) (青空社から 1995 年に復刊されたものを参照した)
 Wenceslau de Moraes. “Permanências e Errâncias no Japão”, Fundação Oriente, Lisboa (2004)